

「^お上山^し城^ろ」からのたより 初秋・第171号

上山ゆかりの建築家 佐野利器の意外な業績

メートル法&ローマ字の普及 (公財) 上山城郷土資料館学芸員 長南伸治

前号でも紹介しました上山ゆかりの建築家 佐野利器の業績について、今回もお話しさせていただきます。まず、前号と重複しますが利器の略歴を記しておきます。

利器は明治十三(一八八〇)年に山形県荒砥(現・白鷹町)の山口家に生まれ、米沢中学在学時に上山町の佐野家の養子となり、その後、旧制第二高等学校から東京帝国大学建築科に進学し耐震建築の研究に取り組み、大正四(一九一五)年「家屋耐震構造論」で工学博士号取得。以後、関東大震災後の復興事業の委員を務め、東京帝国大学・日本大学・東京工業大学で教鞭をとり、清水組(現在の清水建設)の経営に関わるなど、長きにわたり第一線で日本の建築界をリードした人物となります。

この輝かしい業績の他に、利器は、みなさんが現在、何気なく目に行っている「あるもの」を日本に定着させた人物でもあります。



大礼服を纏う佐野利器 (企画展展示予定・個人寄贈) 大正10年撮影

ます。

一つ目は「メートル法」です。今から七十年ほど前、日本では「長さ・面積」の表記方法は、「尺貫法」・「ヤード・ポンド法」・「メートル法」の基準の異なる三種類の方法が乱立する、まさに「戦国時代」の様相を呈していました。その状況を憂いた利器は、世界基準の「メートル法」への統一を目指し、その普及に尽力。そのかいあってか、昭和二十六(一九五二)年、計量法が制定され、公式書類では「メートル法」表記が義務付けられました。もう一つは「ローマ字」です。ローマ字

も、今から七十年ほど前の日本では、「訓令式」・「ヘボン式」・「日本式」の三種類の表記方法が存在する、これまた「戦国時代」の様相を呈していました。国はその統一を目指し専門家による会議を開催しますが、意見はまとまらず……。そんな中、昭和二十七年三月、利器は国が設置した国語審議会の会長に任命され、翌年、ローマ字表記の統一基準として「第一・二表(訓令式を基にした新たなローマ字表記方法)」を提案。この案を政府が採用し、昭和二十九年、国の定めるローマ字表記の基準と定め、そして、現在にいたっています。

上山城では建築界の他に、二つの「戦国時代」を治める輝かしい功績を遺した佐野利器を紹介する企画展を十一月二十六日まで開催しています。今月二十二日には記念講演会を開催します。講演会は予約制です。お早めにお申込み願います。

【常設展示室から】抽選で景品が当たる、クイズ上山城探検、を毎月実施中。クイズを解きつつ、ご見学をお楽しみください。